

Title	エドワード・カーペンターにおけるナチュラリズムの試論 : 近代文明批判の一視点
Author(s)	稲田, 敦子
Citation	聖学院大学論叢, 6: 51-62
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=695
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

エドワード・カーペンターにおけるナチュラリズムの試論

—近代文明批判の一視点—

稲田敦子

A Study of the Naturalism of Edward Carpenter

— A View of his Critique of Modern Civilization —

Atsuko INADA

Historically, the concept of nature has been in correlation with the sensibilities of each passing era, and classified as an individual social category. The current negative aspects of environmental destruction provoked by the domination of nature through technology has raised present ethical and moral conscienceness of people with regard to this problem. A man well ahead of his time, Edward Carpenter (1844-1929), being aware of the inescapable relationship between man and nature and striving to awaken this innate conscienceness in people, advanced a critique of modern civilization in a bid to instill his views on environmental problems into contemporary society. This paper examines the problems surrounding the interrelationship between the “outside” environment and the “inside” environment as advanced by Carpenter in his critique of modern civilization.

The main thrust of his critical essay on modern civilization was the classification of two meanings for disease as a loss of oneness or as a loss of harmony. The first malady he defined as being brought on by the wasting of one’s constitution by social parasitic groups, and the second malady he described as the falling from a state in which one is fully cognizant of his oneness to a state in which this oneness has disappeared. Aiming for a restoration of harmony from within the latter state, Carpenter elucidated what the basis of life is, and experimented with the aim of actualizing a revolution in lifestyles by undertaking production activities in harmony and intimate communion with nature while experiencing nature that labors to interweave nature and life ‘ineinanderarbeiten’.

Key words; Edward Carpenter, Naturalism, Critique of modern civilization, Social Darwinism, Neo-Lamarckism

はじめに

歴史における環境的自然は、その各時代と相関的であり、一個の社会的カテゴリーである。技術による自然支配がもたらす負の側面が自然破壊に至っている今日、この問題性に対する倫理意識が喚起されている。

本来、自然と人間は、深く根源的な関わりをもっている。この関係性の自覚が、人間の人間的な生存そのものを可能ならしめ、人間を真実に人間たらしめているという、重層構造として現代文明の発展過程に密接に関与してきた。産業革命は、いわば理性による外的自然に対する自然処理過程としての文明化の一段階を示すものであった。しかし、19世紀をはさんだ「革命」と「反動」との複雑な時期に、「自然化された自然」と「自然化する自由」の問題が提起されてくる。それは、一方では、「人為とは、〈自然〉が作り出したもろもろの道具の助けを借りて働いている〈自然〉にほかならない」(オルバック)という認識が、人為的な諸制約をいっさい批判する方向に働き、自然に対して無制限に働きかけようとするさまざまな運動を展開させていった。他方でまた、自然との不可分な関係の中こそ人間存在の根本があるのであり、近代文明はその自覚を喪失させていくという主張を通じての近代を批判するとともに、自然の意義を改めて提起する方向もあった。こうした動きは、19世紀のイギリス思想界において、ベンサム主義ないしは個人主義のめざす方向と、集産主義の諸目的のために国家干渉を認める方向とが互いに並行して発展していた状況の反映である⁽¹⁾。

エドワード・カーペンター Edward Carpenter (1844-1929) は、このような中であって、自然の問題を主体的に組み込もうとしたのである。彼は、ナチュラリズムにかかわる根源的な問題を、萌芽的ながらも提起した先駆者であった。

現代は、自然の構造とそこにおける人間の位置、その文化的営為の意味を考えざるを得なくなっている時代である。本稿では、彼による近代文明批判における、〈外的自然〉と〈内的自然〉の相互媒介性をめぐる問題を検討することを課題とする。

1 「調和の喪失」の二側面

(1) 時代の影の認識

カーペンターは、1844年イギリスのブライトンで生れた。この保養地は、1841年に鉄道が開通した影響もあって繁栄していくが、その町で成長した彼は、逆にヴィクトリア期のイギリス社会への違和感も覚えた。そして、科学と進歩への楽観的信念が非人間的な事象を生み出していくという事実を見抜いて、彼独自の解放のビジョンを描くことになる。

カーペンターの文明批判として『文明—その原因及び救治』“Civilization: Its Cause and Cure”が最初に公表されたのは1889年であったが、それは1870年代からの不況の影響が深く浸透していった時期と重なっていた。イギリスでは、19世紀を通じて、工業化と都市化が進展したが、それにともしないさまざまな問題が生じていた。工業部門の国民所得が農業部門を上まわったのは1821年であったが、消費財の単一市場としては世界最大となったロンドンで、「大きなおでき」(great wen)が指摘されたのも、すでに1930年のことである⁽²⁾。人口動態もまた大きく変化し、ヴィクトリア時代を通じて、イングランド南部諸地方からの絶え間ない移住が見られ、それが市街地をさらに遠郊へと広げていく条件を作り出した。加えてアイルランドからの移民は、1840年代後期の大飢饉によって急激に進み、またイースト・エンドへのヨーロッパ大陸からの移民も、東ヨーロッパにおける政治的ならびに人種的迫害によって促進されていた。このような人口増加が、低賃金、失業そして都心部における過密化した生活状態を生む一因となった。しかし、生産手段を持たない最下層の労働者階級の生活は、経済成長に支えられて国民所得が増加したにもかかわらず、いっこうに改善されなかった。そして、産業資本主義の生み出したこれらの問題が未解決のままに拡大しつつあった中にあって、1873年からは大不況期に入り、その波が大きいのかかかって、事態をさらにいっそう深刻化させていた。

カーペンターは、こうした時代状況の中で成長した。「君は、貨幣にたいして利息 (interest) を取り、生命にたいする関心 (interest) を失うのか⁽³⁾」という問いかけは、すでにToward Democracy(1883)の中で発せられていた。もともと手段であった貨幣が目的とされるようになったという価値の転換は、人間の〈本来の生〉とそれを具体化する形式との間の敵対的な関係の反映である。彼は、政治的制度を「魂のなかに存在するものの影 (必然的に生じる影)」にすぎないとし、国家もまた「目の動きや容色のなかに最初に表現されるものの影にすぎない⁽⁴⁾」と位置づけた。カーペンターにすれば、人間が道具的存在に過ぎないものによって逆に道具化され、ふりまわされている状況は、体ばかりで生命をそなえていない形式であり、〈すでにいのちを失った環境〉であったのである。彼はこのような状況を、自己の内部と外部社会における二重の意味の「疾病」とし、「調和の喪失」であるとみなした。それは、人びとが内実が伴わない形骸化した「影」を求めて「実質」を見失ってしまっている状況への告発であったと言えよう。

(2) 「調和の喪失」

カーペンターの『文明—その原因及び救治』の構成は、次のように分けられる。第一は文明の規定と現状把握、第二は文明と未開社会との比較、第三は文明の衰退、墮落の原因の解明、第四はその対処の具体的方法である。彼は、モルガンの『古代社会』、ウォレスの『アマゾンの旅』『マレー半島』、ウッドの『人間博物史』、ドッジの『我国の野蛮なるインディアン』などを参照しつつ、多くの種族の社会生活のさまざまな面を例証した。特に、彼らの勤めや仕事において共同性が見られ

ること、社会的感情において共同利益の念が強固なこと、さらに、万人がほとんど平等であり、差別が存在しないことを示したのである。

彼は古代社会におけるそのような状態を「健康」としたが、それは、彼の同時代においてあまりにも多くの「疾病」が存在していることを痛感したことによる。「健康」な社会のあり方は、現代社会にみられる「病氣」の症状を否定することによってのみ表現されているのであり、その判断の起点は現代に置かれていた。つまり、こうした「疾病」のない状態を想起し、その延長線上に「健康」な古代社会を位置づけたのである。このことは、次の第三・第四における「病氣」の処置とも関連するが、彼にとってはあくまでも、現代文明社会の病根を個々の状況の中で治していくことが主眼なのである。

彼の近代文明批判論で中心課題となるのは、「統一の喪失」または「調和の喪失」としての“disease”の二重の意味での規定である。すなわち、第一は、「社会的寄生群による組織の消耗」から引き起こされる「疾病」であり、第二は、自己がその統一体として自分そのものである状態から、自らの中で「統一の消失」状態になってしまった「疾病」である。彼は「調和の喪失」状態を次のように説明している。

「疾病」は、「健康」を構成する生理的統一の喪失から発生する。その結果、各部分間の闘争ないし軋轢、もしくは諸器官の異常な発達、また組織の消耗などを引き起こす。われわれの近代生活もまた「真の社会を構成するところの統一が喪われて、そのかわりに各階級間ないし個人間の闘争、他を侵害するようなあらゆるものの異常な発達、およびおびただしい社会的寄生群による組織の消耗など⁴⁵⁾」が見られるが、それは諸種の民族が一度はかからなければならぬ病氣である。「社会的病氣」とは、人間の体がその全体の必要に応じた供給を行わず、全体組織に寄生してしまう身体の病氣と同じく、調和の喪失によって「個人間の闘争、他を侵害するようなあらゆるものの異常な発達を不可欠にひきおこし、ついには精神的「疾病」にかかってしまっている状態のことである。

科学的文明の継続的進歩を信じ、そのことが知性の発展と同義語となっている状況では、自然は規範の源ではなくなり、すべての自然的な存在がそれ自身の本質的価値を奪われていく。彼が指摘した「調和の喪失」状態は、この本質的価値の喪失をも意味するが、その対象は人間と国家の関係にも及ぶことになる。平和と秩序を維持する外的機構としての国家は、本来個人の労働と生産の体系を安定的に維持するためのものであった。しかしこのような国家によって支えられる体系が拡大すればするほど、それは自然と対立した人工的領域の拡大を意味することになり、個人の内面的価値から切り離される。しかもこの文化の領域を支配する論理が機械論的なものであるかぎり、それ自身が人間の相互疎外をもたらさざるをえないような構造となる。

この疎外状況に関して彼が指摘しているのは、個々人それぞれにおける自己内部の「統一の喪失」である。これは、自己内部において、外的自我と内的自我との不統一という自己意識の中で渦

巻く個的狀況を見据えることから出てきたものだった。個人の自由な自己決定の余地が各側面から侵食され、縮減されていく中で、自己の生の創造的な運動が変質していく。そしてこの運動の源である生のエネルギーは、方向を変えて、断絶的な「硬直」したものになってしまう。いわば、内発的な創造性が喪失した内実のない形態のみが残るのである⁽⁶⁾。これには、カーペンター自身がケンブリッジにおける聖職フェローを辞するに至る内的煩悶や苦悩も大きく影響している。硬直された静態的な自律は、客体への能動的な関わりにおいて自己を高める主体性を与えることはできない。また、対象知に拘泥する人格は、〈我—それ〉の関係のみに生きることになる⁽⁷⁾。この関係の展開過程で、〈自然〉世界に対しての際限ない支配の拡張が人間理性の専横によって進められていった結果、人間自体までもがこの過程に組み込まれることから回避しえぬこととなる。カーペンターは、この硬直性から脱却する自己更新への志向を、〈いのちを失った環境〉の回復とあいまって模索することになる。

(3) 外的自然と内的自然の相互媒介性

こうした問題状況の中で、自然と人間との宥和的關係を回復し、文化的営為をなすことはどのように可能となるのであろうか。

ふつう〈自然〉という言葉は、物質と生命と心のいずれか、またはそれらの総合体としての「ありかた」を意味し、ほぼ次の三点にまとめることができよう⁽⁸⁾。第一は、物質的な元素やその集合である無生命の物体を示す「物質的（物理的）自然」である。これは、時間的および空間的に宇宙と一体としてあることから、「宇宙的自然」とも呼ばれる。第二は、第一の自然の一部である有機分子によって発生した生命体で、「生命的（生物的）自然」である。これらのいわば「物としての自然」に対して、第三は、「心的自然」ないしは「内的自然」である。これは、「人間性」「人間的自然」という語によって心の中にある衝動や本能のような「自然的なもの」をも含むことになる。

すでに1820年代なかばに、ロバート・オーエンによって内的環境の問題は提起されていたが⁽⁹⁾、カーペンターの視点は、オーエンとは異なる。「人間は自然を超えるように自然によって素質づけられた存在である⁽¹⁰⁾」ことの意味するものは、内にある否定的な要素を止揚し、対立するものとの相関的な関係をも組み込む内的自然を通しての人間と自然との媒介性である。カーペンターは、この内的自然への志向を「人間は、……自身の自由と幸福とを把握し、実現するために、すなわち、自分の意識を外的な可死的な部分から、内的な不死的な部分に転ずるために、……自分の運命について意識的にならなければならない⁽¹¹⁾」という自己内部への強い認識を基盤として示した。このことは、利己性という特殊性への志向ではなく、個的主観が全体性（自然）との合一のうちに存在することを、個人の自律として求められることを意味する。各人が外的な権威や制度によらず、内心に真理を見いだし、それを自己の意志から確信するという自律への志向を、彼は「社会のなかでコミュニティに向かう運動と内なる野蛮すなわち自然運動」という二つの試行を通じて調和を取り戻

す努力を進める中で探ろうとした。これらは、「或る意味においてまったく異なっているが、しかもあきらかにその内から生長しかけているものだ¹²⁾」という認識に立っていたのである。

現実の文明的状況の中で、外的自然に対する実践的関わりにおいて人間が対象とするのは自然に内在する能力やエネルギーである。自然と人間的生との統一性は原始的な一体性ではない。「人間は自己の労働において自然を支配しようとするのではなく、自然の中で労働しつつ生きる¹³⁾」のであり、「自然と生とが相互浸透的に労働する (ineinander-arbeiten)」ことになる。こうした「生活世界的な自然経験」において、「自然との理性的共生は、全く技術的に支配されてしまっていない生活形態を要するし、全く技術的に支配されてしまっていない生活形態は自然との共生をも再び可能にするだろう¹⁴⁾。」カーペンターは、「内なる統一と外なる統一とを全く不可分のもの」としてとらえ、自然との直接生産活動による生活革命の具体化をめざそうと幾つかの試みを実践していくことになる。

彼は、1881年にブラッドウェーで、ラスキンとは異なる協同思想の実験としてのコミュニティを造ったが、彼の関心は、いわばハードな側面としての実験的制度のみならず人間存在の道徳的・精神的基礎としての協同への試みであった¹⁵⁾。彼が文明批判論で自然への復帰に言及した時、具体的に考えていたのは、自然との直接交流としての各個人それぞれの生産活動であって、そこには自然との「一体化」を求めるという意識はない。彼の「産業の村」構想は、中小企業の存続をはかり、さらにそれが新しい軸をもって生産活動を発展させていくことを目指して、生産者の主体的な活動組織づくりとして考えられた。シェフィールドの刃物製造業者は、仕事の一部を「小親方」に賃貸し、刃物職人の大多数は自分の家や小さな作業場で働いていた。彼は、こうした状況を、新しい視点から生かして、小規模ながら直接生産の共同体をそれぞれ作り、その中で相互の共同活動を目指そうとしたのである。このことは、〈田園・工場・作業者〉という連結したあり方を生かそうとするものであり、大企業による生産活動への対抗組織として、地域の実情に即した試みであった。

カーペンターは、近代文明批判の講演を行った1889年の5月に、鉄鋼の街シェフィールドの煙害問題を公にして反対のきっかけをつくることとなった¹⁶⁾。鉄鋼輸出の成長を支えた製品は、亜鉛鉄板・ブリキ板ならびに輸入鋼材に依存するその他の再圧延製品であったが、そのことは必然的にこれらの製品を生み出す工場の煙害を増大させたのである。彼はその後、健康を害し、シェフィールドとチェスターフィールドのほぼ中間のミルソープに移るが、そこでも自然を媒介とした共同生活は続けられ、「原則として人間労働、すなわち行動として表出された人間の肉体および精神の結合した諸力」としての「自然的価値基準¹⁷⁾」による解放のヴィジョンの可能性が試みられたのである。

2 文明批判の背景

(1) 社会ダーウィニズム批判と新ラマルク主義

19世紀の西欧思想界に最も影響を与えたものの一つはダーウィンの進化論である。彼の表した『種の起源』(1859年)は、「適者生存」を唱えて生物学界に大きな旋風を巻き起こしたが、その理論はやがて社会理論へも適用されていくことになったのである。その自然選択説および生存競争説は、楽観的な〈進歩の観念〉と結合し、社会ダーウィニズムとして登場した。その基盤には、自由主義経済の基本原則である〈レッセ＝フェール〉があった。『種の起源』の自由選択説は、各個の自由意志に任せておけばおのずからひとつの秩序を形成するというその楽天的な経済理論と適合したのである。社会進化論は、やがて他の社会現象を弁証する場合にも使われ、ついには19世紀後半の最も進んだ社会理論として大流行することになった。スペンサーは、その代表者であるが、彼は人類の発展過程を、軍事的闘争の段階から産業的闘争の段階へと進化するものとし、さらには、こうした闘争を越えた理想社会への展望までも描いた。

しかしながら、そもそもダーウィンの進化論は、同種の個体間の競争が基本的なものであった。したがって、それを人間をも対象として個人間の競争に適用し、優勝劣敗を理論化することは、ダーウィンの進化論からの明らかな逸脱である。だが、社会有機体説や国家有機体説などは、社会ダーウィニズムから演繹された理論が現れて脚光をあび、資本家や権力者などを適者生存の勝者と位置づけ、彼らの存在を正当化する役割を担うことになったのである。

社会ダーウィニズムがこのように強者生存の合理性を説くとき、当然ながらそれへの批判も起こってきた。特に、産業資本主義の展開に伴う〈影〉の部分が拡大していくと、その理論では現実を覆いつくせなくなったのである。社会進化論批判がダーウィンへの批判としてなされるとき、おのずとダーウィン以前の進化論者ラマルクが再び呼び起こされたことはそれなりに必然であった。そしてそれは、時を経て、新ラマルク主義¹⁸⁾として確立され、思想界に一定の力をもつこととなる。カーペンターが『文明—その原因及び救済』を表わしたのは1889年であり、彼もまた新ラマルク主義の影響をかなり受けていた。

ラマルクは、科学的経験主義に対するものとして、いわば「可視的影響」に代わって「有機構成」を分析の対象とし、そのことが「全体」という観念に内実を付与するようにさせた。そして、生物の系統は、一連の階層的な秩序をなすものであり、「枝分かれした系列」という重要な観念を引き出し、その体系化を進めたが、それは、彼が表した *Philosophie zoologique* 2巻において、進化論のほか生命論、感覚論が記述されていることにも示されているのである。

彼は、地上の動植物など有機体が多くをかけた自然の生成物であるという自然発生を示し、それらの素描型が、適宜な場所および環境条件内において形成されたものであると結論づけた。よ

って、創始された生命の能力や有機的運動の諸能力が、漸次に諸器官を発達させてきたのであって、時とともにそれらの器官ならびに部分が多様な様式を生じ、このことにより、体制の組成と形態とにおいて獲得された進歩および諸部分の多様性が維持されてきたということになるのである¹⁹⁾。

ラマルクの前進的発達観念には無意識的にであれ自然の完成化という原理が背景にあり、生物の現象に対して「神秘」を感じ、宇宙の奥深くにあるなにかの根本原理に達することを志向しているあらわれと見ることもできる。そこでは、18世紀における自然の秩序への関心から生まれた「急いだ総合化」(プロノフスキー)による難点が多く存在し、批判をも生み出していく。その後ダーウィン説が主流となり、さらに新ラマルク主義に至った時に、主眼とされたことは、進化論の現存するあらゆる形態のうちで、ラマルクが発展の内的かつ心理的原理を承認するものであるという点であった。ラマルクをその時代環境の中に位置づけるに際して、彼にある科学的要素とイデオロギー的要素が混在している点を充分に把握しておく必要があるが、器官に対する機能の優位性や、個体発生は系統発生を繰り返しそれを自己の内に要約するという「総合」性が注目されることになる。

カーペンターは、社会進化に対し、社会はその存在の秘密を求め、必要に適合すべく外皮を脱ぎ捨てて進み、社会進歩は、法や制度に対する固定化の傾向に対する絶えざる闘争という形をとると考えた²⁰⁾。彼は系統だててラマルクを論じていることはないが、思想状況の先取りとして、彼の「樹皮剥落」の理念および系列の展開に影響を受けたのである。カーペンターは、権力の集中構造が固定化し、効率的社会の有用性を推進する制度を「外皮」と見なしたが、その指摘、糾弾に強調をおくよりもむしろ、その状況に対する喚起力としての人間と労働の尊厳性による「新しいヒューマニティ」の成長に強い関心を持ち、そのあり方を模索した。この点は、彼の文明批判の最初が、フェビアン協会における年頭講演ではあったが、社会ダーヴィニズムと効率的社会や制度における適者生存に疑義を抱かなかったフェヴィアンとは全く立場を異にした。

ベルグソンによると、一応「新ラマルクはいつもその原理に訴えるわけではないが」と留保をつけながらも、新ラマルク主義は、「進化論の現存するあらゆる形態のうちで、発展の内的かつ心理的原理を承認するただ一つのものである。」(『創造的進化』1907)とされている。彼は機能の行使を通じて器官が創造されるとする「努力」の概念²¹⁾のうちに、生の飛躍の創造的能力に類似したものを見出した。この内的な生の創造力をカーペンターは、「共同の生」として、その意識の覚醒と成長を自然との相互媒介性を進める中で促進していこうとしたのである。

(2) インド思想における「調和」

新ラマルク主義とならんで、カーペンターの思想形成に影響を与えたものに、インド思想がある。彼の基本的な意識には「楽園喪失」と社会進化への批判があるが、自然観をめぐる「調和」の意識には、インド思想の反映が見られるのである。彼は早い時期から、インドの神秘思想に関心を抱いており、1880年から81年には、シンハリ人の友人アルナチャラムから『バガヴァッド・ギータ』が

送られていた。また実際に1890年10月から翌年にかけては、東方への旅に出て、スリランカおよびインドに長期滞在し、数人の導師との直接的な対話を試みている。

インドでは、精神に対立するものとしての物質的自然は、真に考察の対象とならなかった。二元論の体系を樹立したサーンキヤ学派においても、精神は物質的存在を認識することによって自己を具体化するのではなく、物質的存在への関わりを離れ、独存することによってその本来の状態を実現すると考えられているのである。この体系においても、精神に対立するものとしての物質的自然は真には考察の対象とならなかった。本来最高实在ブラーマンは個体の本質であるため、哲学的探求においても内在する普遍我アートマンの探求が主流であった。しかしその後、自然界の生成や運動変化を経験・観察に基づいて合理的に解釈しようとする動きが起こってきて、心的現象を自然現象と同列に取り扱われるようになった。

その一例は、ブラフマナ文献以前のヴェーダ時代の自然観として「天則」(リタ)の観念である。「天則」は、自然界を整然と秩序づける法則であると同時に、人間界における道德の規範でもあった。「天則」の原語が「季節」を意味する言葉と同じ語源をもっていることから分かるように、天則の観念は規則的に循環する自然現象の観察を基礎とするものであり自然界と人間界は同一の理法によって律せられていると考えられたのである。自然は天則に従うときには秩序および均斉が保たれ、天東に反するとき変異が生じる。人間においては天則は真実や正義となり、それに反するものは虚偽や不正となる。その後、祭詞や呪句にこもる神秘力としての〈ブラーマン〉が万物に対する支配力をもつようになり、天則に替ることになった²²⁾。

東方の思想に対する強い関心には、18世紀的合理主義や唯物論に対するロマン主義の反動の重要な部分が占められていた。カーペンターが出会った『バカヴァッド・ギータ』は、クリシュナの神とアルジェナという戦闘を前にして苦悩する勇者との対話による叙事詩であるが、それは、有限者と無限者との対話となっている。死すべき者としての人間の存在の条件はすべてクリシュナ自らから生じるものであり、恐怖と恐怖からの自由もこの条件に含まれる。また空間の平等による魂の真の平等への達成は、人間の個人としての部分より、宇宙的ないし普遍的部分に属するものであり、そこには「規制と幽閉からの自由の意識、包括の意識、生命感²³⁾」があった。ここにみられる普遍的共感とは、カーペンターにとって新鮮な調和感への衝撃でもあった。

この東洋思想との出会いは、カーペンターにとって西欧思想の相対化の一契機ともなるべきものであった。意識の新しい次元としての普遍的、または宇宙的意識は平等感の一側面として大きなものとなったが、「他者」の存在また「他者」への働きかけに関しては、彼の中で必ずしも全面的に受け入れられるものではなかった。東洋において、聖なるものへの自己集中と没我が強調される時、「他者」へのいわば社会的愛情へと広がる献身の契機は、どこにあるのだろうか。彼は、アルナチャラムによるイギリスのインド支配への激しい告発に対して、イギリス支配の有用性を対置して、その工業化や機械文明がインドではまだ価値と効用を持ち得るものと考えていた。「西欧で我々は、

……他人にたいする献身こそが、自我の制約を取り去り、生と意識のより大きな領域へと移行行く最も自然な道だと考えるようになって」いると、彼は両者の比較の中からその違いを描いた。その上で、西欧は、自らに固有の方法を固守するだろうが、ほかの方法を併せ用いることから利益を得ることもあるだろう²⁴⁾としたのである。

ネオラマルキズムの影響にも見られるように、カーペンターにおいては、進歩思想を基盤にしつつも、「制度と慣習の巨大な多様性」を確認し、国家の介入、官僚制の強化を排除して、社会は新しい理想を探求しながら古いものの外皮を漸次脱ぎ捨てて、共同の生といういわば公共の良心の覚醒のプロセスが思い描かれることになるのである。

3 おわりに——「ヘーゲルの誤用」批判に対してのナチュラリズム

カーペンターの文明論に対して、ハインドマンは「統一から解体へ、そしてさらに高次の統一へと進むヘーゲル的な歴史発展の理論を拡大したもの²⁵⁾」の一つにすぎず、しかもそこには、文明を歴史における決定的後退であると見方があると批判した。ハインドマンの論点に見るように、カーペンターへの批判には、第一にはヘーゲル学説の誤用であるとするものがあり、第二には彼が「文明」に対置して「野蛮」という語を使ったことに反発し、進歩発展思想への全面的否定であるというものがあつた。これらの批判は、カーペンターの本来の意図とは少しずれたところでの反応であつたが、当時の社会主義的啓蒙運動が「科学的」文明の継続的進歩を信じ、かつそれが知性の発展と同義語となっている状況の一端を示している。

確かにヘーゲルは、ホッブスにみられたような近代啓蒙主義の機械論的自然観を批判して、ふたたび有機体的、目的論的自然観を回復しようとした。機械論的な自然観は、自然を有限で特殊なアトム結合にすぎないものとして、その有機的連関を破壊し、自然を混沌のうちに放置することになる。その中であつては、人間の位置づけもまた見失われる。ヘーゲルの課題は、私的目的と公的目的が相互浸透し、個が個としての自立性を持ちながら、しかも他者と共同的に結合していくといういわゆる人倫的共同体を達成することであつた。彼は、歴史が自己目的的に発展していくものでありながらも、近代市民社会が貧富の差の拡大し、精神的荒廃を引き起こすものであるという現実の矛盾を前にして、それを克服し、人倫的一体性を回復する役割を国家に求めた。だがそこでは、自然は人間にとっての労働の対象という意味をも含めて、有用性の体系の中に組み込まれているにすぎなかつた。

しかし19世紀における産業資本主義の展開は、人間と自然とのこうした予定調和的な関係を崩し、文明の名による自然に対する人為の優越が種々の問題を惹起せざるをえなかつた。こうした新たな歴史段階において、ヘーゲル的な体系の転換を迫るのがナチュラリズムにおける生命中心主義の倫理²⁶⁾であつた。それは自然そのもののうちに生命をみ、生命の循環をみながら、人間の営為を可能

なかぎり、それに調和せしめようとするものであった²⁷⁾。

カーペンターにおける「調和の回復」という課題は、「疾病」(＝「調和の喪失」)に状態にある近代文明社会の社会的改革であると同時に、それを担っていく主体の自立をめざすものであった。それは、生活の基礎が何であるかを明らかにしながら²⁸⁾、自然とのかわりをとらえ直していく作業である。その一環として彼は、国家指導型のものと同発的なものとの〈二重の集産主義〉を提唱した。このことは、「ある意味において、互いに均衡を保ち、訂正しあい、そして、いずれも、現在の文明とは全くことなっているが、しかもあきらかにその内から生長しかけている²⁹⁾」であるとの認識によるものであった。

人間が自然の有機的循環から抜け出して行こうとすれば、そこにおける価値を失わなければならないし、さらには生の意味の喪失ともならざるをえない。しかし、自然の生命系との有機的連関に価値を認め、それとの相互依存を認める自然観に立つならば、人間同士の関係においても相互依存を自覚し、生の意味の回復にもつながってくるであろう。この意味からすれば、カーペンターの試みは近代文明の功罪がより鮮明となる20世紀を前にして、萌芽的ながらも自己内外の倫理意識を喚起する自然観の基本的な枠組みを提起したものと位置づけることができるであろう。

注

- (1) 栄田卓弘『イギリス自由主義の展開』(早稲田大学出版部 1991年 p. 2)
- (2) ウィリアム・コベット(1763-1835)が『農村紀行』(1830)の中で、当時における大都会の社会問題を象徴的に捉えた。
- (3) Edward Carpenter, *Toward Democracy* (1st ed.) (Manchester and London, 1883) pp. 21-22
- (4) *Ibid.*, p. 10
- (5) Edward Carpenter, *Civilisation; Its Cause and Cure*, London, 1889 (石川三四郎訳)『文明・その原因及び救治』(日本評論社 1948年 p. 21)
 翻訳者である石川は、思想的歩み出しをはじめたばかりの模索の時期である1907年にカーペンターの書に出会っている。その後、亡命生活を経て「土民生活」思想を提唱していった約20年間カーペンターとの交流があった。石川はこの著作が日本の状況に対しても有益な示唆になるとしてすぐにも翻訳しようとしたが、諸事情から実際にこの翻訳が実現し出版されたのは、第二次世界大戦後になってからであり、世界古典文庫の一つとして出されることになる。参照 拙稿「石川三四郎における『蔭』認識の歴史的展開」(『アジア文化研究別冊2 伝統と近代化』1990年)
- (6) 参照 加藤宗幸「エマソンとカーライルと形式と」(『北九州大学文学部紀要』第42号 1990年)
- (7) 住吉雅美「マックス・シュティルナーの近代合理主義批判」(三)(『北大法学論集』第42巻 6号 1992年 p. 154)
- (8) 中埜肇「自然哲学の現代的視点—人間学的自然哲学の試み—」(『自然とコスモス』岩波書店 1985年 p. 248)
- (9) 永井義雄『ロバート・オウエンと近代社会主義』(ミネルヴァ書房 1993年 p. 19)
 「人間は二重の創造により形成される。一つは、出生に先立つもので、霊妙な力を持ち、しかも肉体的にも精神的にもそれ以上に霊妙に組み合わせられた神秘的な、神による組織化である。もう一つは、それに付け加わる第二の新しい新しい創造であって、主として成人が働きかけて第一の創造を現世で成人に至らしめることである。」

- (10) Vgl. Spaemann, R., 'Nature', Handbuch philosophischer Grundbegriffe, Munchen 1973, Bd. 4, s. 965
- (11) Carpenter, Civilisation; Its Cause and Cure (石川訳 前掲書 p. 48)
- (12) Carpenter, *ibid.* p. 84
- (13) Mittelstrass, J., *Wissenschaft als Lebensform*, Suhrkamp, 1982, s. 51
- (14) *Ibid.*, s.61
- (15) 都築忠七『エドワード・カーペンター伝——人類連帯の予言者』（晶文社 1985年 p. 63）
- (16) *Sheffield Independent*, 25 May, 1889
- “Only a vast dense cloud, so thick that I wondered how any human being could support life in it, went up to heaven like the smoke from a great altar. An altar, indeed, it seemed to me, whereon thousands of lives were being yearly sacrificed. Beside me on the hills the sun was shining, the larks were singing; but down there a hundred thousand grown people, let alone children, were struggling for a little sun and air, toiling moiling, living a life of suffocation, dying (as the sanitary reports only too clearly show) of diseases caused by foul air and want of light—all for what? To make a few people rich! And this was not a lunatic asylum! I descended into the smoke. The sun went out; the chimneys towered round me, belching forth thick volumes.”
- (17) 永井義雄 前掲書 p. 61
- (18) M. バルテルミ=マドール 横山輝雄・寺田元一訳『ラマルクと進化論』（朝日新聞社 1993年 pp. 175-177）
- (19) 八杉竜一『進化論の歴史』岩波書店 1969年 pp. 96-98
- (20) Edward Carpenter, 'Social Progress and Individual Effort', *Today*, Feb. 1885 (都築 前掲書 pp. 78-79)
- (21) M. バルテルミ=マドール 前掲書 p. 188
- (22) 服部正明『インドの自然観』（『自然とコスモス』岩波書店 1985年 p. 299）
- (23) Edward Carpenter, *From Adam's Peak to elephanta* (1892, 1910 ed.) pp. 165-6
- 『バガヴァッド・ギーター』は、『マハーバーラタ』の第6章の一部であるが、独立した宗教詩として知られ、大きな影響力を持っている。内容は、クル平原での戦いが始まる直前、同族相争う事態に苦悩し、戦意を失いかけているアルジュナに対して、クリシュナが運命に従って義務を果たすことを説き、アルジュナの問いに対して、輪廻、信仰、解脱などの問題について答え、万物の根源としての姿である〈一切形相〉を見せるという構成になっている。個別の利害や結果に執着せずに本分を尽くせという哲理は、その後の独立運動の志士たちの行動の指針となった。（長谷川明『インド神話入門』新潮社1987 pp.110-111）
- (24) *Ibid.*, pp. 178-81 参照 都築 前掲書 pp. 132-133
- (25) *Today*, Feb. 1889 参照 都築 前掲書 p. 103
- (26) 参照 藤原保信『自然観の構造と環境倫理学』（御茶の水書房 1991年）
- (27) 藤原保信 前掲書 p. 165
- (28) Edward Carpenter, *The Healing of Nations and the Hidden Sources of Their Strife*, London, 1915, p. 18
- (29) カーペンター（石川三四郎訳）『文明・その原因および救治』p. 84